クロスロード　人生のとき

兄・高倉健への相聞歌

七回忌に合わせ 句集出版

「辛抱ばい」を胸に努力

「魂はここに」とファンに伝え

俳人　森敏子さん

〈炎天の漢を強く記憶せり〉。俳句の作者は福岡県在住の森敏子（八七）。七年前に八十三歳で他界した俳優、高倉健の妹だ。

四半世紀を超す句歴がある森は、昨年十一月、兄の七回忌に合わせて句集「飛花落花」（文学の森）を出版した。冒頭の句をはじめ、兄妹の深いつながりと愛情が伝わる百二十句を収めている。

「『八甲田山』や『南極物語』など寒い場所での映画が多いのですが、私の中では〝炎天の漢〟なんです。大学の夏休みに帰省した兄が、高校の校庭で棒高跳びの練習をしていた。その思い出のせいかもしれませんね」

▽薔薇枕

兄妹は、日本有数の炭鉱地帯だった筑豊炭田の一角にある福岡県中間市で育った。上二人が男、下二人が女の四人きょうだいで、高倉は次男、四歳年下の森は末っ子だ。

父の小田敏郎は十六歳で海軍に入り、戦艦比叡の乗組員を経て、戦時中から地元の炭鉱で作業員を束ねる仕事をしていた。身長一八〇㌢を超え、海軍の相撲大会で優勝した逸話を持つ偉丈夫で、まれに見る美形でもあったという。父親への憧れは、兄妹に共通していた。

長年連れ添った夫を亡くし、五十代後半で俳句を始めた森の第一句集に、こんな句がある。〈薔薇枕添ひ寝の枕低くして〉

バラが好きだった父の腕枕で寝ていた幼い頃の記憶を詠んだ句だ。俳句仲間には男性との添い寝を想像した人が多かったが、「兄だけが分かってくれた」と話す。「電話で『おまえ、おやじ詠んだね』と言われました。『薔薇枕という言葉の似合う男はおやじしかおらんやろ』と言うんです」

高倉は年を取ってから、身内に対しては本名の小田剛一ではなく「剛一郎」と名乗るようになった。「父親が敏郎でしょ。娘が『伯父さん、敏の字をママがもらったから郎を付けたんでしょ』と言うと『ばかやろう』と照れていたみたいです」

▽最後の電話

子どもたちが巣立ち、故郷で一人暮らしを続ける妹に、高倉はしばしば電話をかけてきた。好きな歌をしんみり歌うことがあれば、真夜中に二時間近く二人で話したこともあった。

最後の電話は、亡くなる一カ月前だった。

親類の法事の打ち合わせをしながら、高倉は森に「仏は上から見てるからな、いつも必ず見てるからな」と繰り返した。そして、普段と同じように「じゃあ元気でな」と電話を切った。それが別れの言葉となった。

高倉が悪性リンパ腫のため、都内の病院で死去したのは二〇一四年十一月十日。二日後には、養女と著名人数人だけが参列し密葬が執り行われた。

森には一切知らせがなかった。十二日になって、東京在住の息子から妙なうわさが流れているという連絡を受けたが、死を確認できたのは、火葬が終わった後だった。

「何が何だか分からなかった。入院していたことも、養女の存在も全然知らなかった。でも、何の連絡もせずに火葬まで済ませてしまうなんて、おかしいでしょ」

唯一の肉親に連絡が来なかったのは、なぜか。

「分かっているけれど言えないことがあります。誰にも会いたくなくて、ずっと泣いてました」

毎日、早朝と夕方、両親らが眠る小田家の墓へ参った。そして、明治生まれの母が子どもたちに教えてくれたのは、武士道の精神だったと思い当たった。「品格を持ち、しっかりしなければと自分に言い聞かせました」

「飛花落花」にその心境を詠んだ句がある。

〈女にも武士道ありし白菖蒲〉。

気持ちを奮い立たせた森に「健さんをしのぶ碑を建てたい」というファンの声が届いた。息子らも企画に参加し、三回忌に、墓がある中間市の正覚寺に記念碑が完成した。

▽幕は降ろせない

さらにうれしい出来事もあった。密葬参列者のうち二人が、遺骨を譲ってくれたのだ。納骨したことで兄は安心してくれた、と森は信じている。

「三回忌の後、ある方が、兄の好きだったカサブランカの花をお墓に供えてくれました。その夜、カサブランカを抱えて自転車に乗った兄が夢に出てきたんです」。兄は妹を案じた後「また来るから。あの世は楽しいから」と言い、自転車に飛び乗り笑顔で去った。

「兄はお浄土にいるのだと安心しました。でも、あのカサブランカはもしやと思い、お墓に車を走らせました。夜明けのお墓に、白い花が昨日のままに咲いていました」

〈癒ゆる日のカサブランカは胸に棲む〉。そのときの句だ。

七回忌で兄への相聞歌を公にしたのは、高倉健を愛してくれたファンに「魂はここにある」と伝えたかったからだ。「いつも誰かがお墓に花を飾ってくれています。私の剛一郎ではなく、みんなの健さんなんですね」

〈さくらさくらあなたへ幕は降ろせない〉。兄への思いは変わらない。

（敬称略、文・立花珠樹、写真・京極恒太＝いずれも共同）

高倉健の遺骨が納められた小田家の墓前に、兄の好きなカサブランカの花を手向ける妹の森敏子。「雨が降るとメランコリーになるけん、必ずお参りに来るとよ」＝福岡県中間市で

■大きかった母の存在■

森敏子は、母タカノが亡くなり実家に戻ってきた時の、思い詰めた兄の顔をよく覚えている。

映画「あ・うん」撮影のため葬儀の1週間後に帰郷した高倉健は、母の遺骨が安置された座敷に閉じこもり、2人の妹に「絶対、部屋に入るな」と厳命した。

「長い時間がたって、出てきた兄が、お母さんの骨をちょっとかじったと言うんです。その時は気付きませんでしたが、兄は座敷でお経をあげていたんだと思います」

2013年に文化勲章を受章した時、高倉は「辛抱ばい」という母の言葉を胸に努力を重ねてきたと語った。母は、それほど大きな影響を高倉に与えた存在だったのだ。

1950年代後半、福岡の実家に帰省、颯流し姿でくつろぐ兄と写真に納まる敏子。高倉健は俳優になったばかり。20代初めの敏子はデパートでデザイナーとして働き始めていた（本人提供）

森敏子の歩み

1935年	福岡県中間市生まれ
2008年	第1句集「薔薇枕」を出版
14年	兄の高倉健が死去
17年	高倉をしのぶ記念碑が完成
20年	高倉の七回忌に合わせ、第2句集「飛花落花」を出版